

壁紙張替えと塗装

1階から3階の旧棟と新棟を結ぶ廊下の壁紙張替えと、防火扉と階段扉の塗装工事を実施しました。



1階のホールより、リハビリ室に行くまでの廊下周りの修繕を行いました。

天井板の崩れ、壁紙の剥がれ、それぞれの汚れなど老朽化によって傷みが激しくなっています。

した。天井板と壁紙を張り替えて、木製のドアと巾木(はばき)の塗装工事をしたところ、はじめとして暗い雰囲気が漂っていた場所が、明るい場所へと一変しました。

張り替えた左右の壁には、当職員が配置などを考え丁寧に40枚の写真を飾りました。まるで写真展をしているかのように見えます。

この場所を通る時に、心のオアシスになればと思います。



今月の作品

「葡萄畑」



施設の玄関付近に利用者様の作品を展示しています。目替わりで入れ替えをしています。9月は2療養棟の作品です。薄い折り紙を手でくるくる丸めて立体的なぶどうを作ります。一見単純な作業のようですが、平たい紙がむくむくと丸く大きく育っていく様は、見ているだけでも楽しいです。また複数名が一緒に作り上げることで、協力し合えたり、

会話も弾みます。



夏祭り



今年の夏祭りは八月十六日、3年ぶりに療養棟を飛び出して旧棟ホールで行われました。感染対策のため療養棟ごとの完全入れ替え制、飲食の提供はなかったもののお祭りの雰囲気存分に味わってもらおうと、厳選したプログラムとなりました。「皆さんのご多幸をお祈りして！」と威勢のよい掛け声で始まったのが介護職員山口さんとCACチーム村上さんによる太鼓の演奏です。ドンドコドン！と鳴り響くりズムが体中を貫きます。

続いて、歌って踊ろう！炭坑節。元栄養課の杉山さんが踊りの先頭、それに続いて一斉に列ができ盆踊りの始まりです。「つつきがあゝ出た出たあゝ月が出たあゝヨイヨイ〜！」事務局長牧ヶ谷さんと看護師菊池さんの元気な声が更にみんなを盛り上げます。車いすに乗ったままでも思わず手が高くあがり、踊りだす利用者さん。普段は見られない、生き生きした表情に思わずこちらが微笑みます。

最後に迫力満点のお神輿が登場。リハビリ真壁さん事務勝又さんら力持ち職員と男性利用者さんたちが手作りお神輿を担ぎ、相談員吉永さん、石田さんがうちわで応援します。

「わっしょい！わっしょい！」熱気の渦に包まれ、大盛り上がり的一天となりました。利用者さんが夏を感じ、少しでも楽しいひとと



きを過ごしてもらえたら嬉しいです。

夏祭りとは別の日に、各療養棟内でかき氷会が開かれました。職員が作ったふわふわのかき氷みんなで美味しく頂きました。暑い日にはやっぱり、かき氷ですね！

太鼓の迫力に圧倒されました



かき氷をアーン



涼しさでニッコリ



夏祭り みんなで ハイチース

実は離島好き

清掃 青木 光子

昨年末、日本海に浮かぶ離島、隠岐諸島に行ってきました。離島ならではの火山が生んだ大地の成り立ちが、地域の景観、地理、生物、文化、歴史に与えてきた繋がりを見ることができました。

隠岐諸島は島根半島から北へ六〇kmにあり、ユーラシア大陸から約六〇〇万年前の火山活動で形成され、四つの有人島と一八〇あまりの無人島からなります。

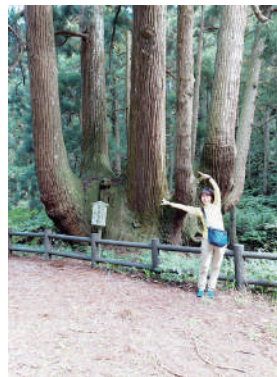
一日目は島の数ある見所の中で一番の景勝地「ローソク島」です。福浦岸壁から赤い救命胴衣を着け、一〇名ほど乗った遊覧船（漁船）でいざ出陣。この日はお天気も良く、海も静かで最高の条件でした。夕日が灯る

その瞬間「さあ、ベストポイントへ行くよ。カメラの用意はいい？」船長さんの掛け声でみんな一斉にシャッターを切る準備です。何度か周りの船と交代でベストポイントに移動してくれました。行きは初対面の一〇人でしたが、帰りの船内はみんなで自分のベストショットを見せ合って大盛り上がりでした。大自然の優雅さに圧倒され、地元漁師船長さんの人柄で素晴らしい時間を共有することができました。



隠岐諸島でいちばん大きな島（島後）は神社も多く、樹齢数百年の杉が立ち並び、島の八〇%を森林が占めています。

す。三大巨木もこの島にあります。その一つ「かぶら杉」は根元付近から六本の幹に分かれ、樹齢六〇〇年と伝えられています。時は室町時代、応永の大飢饉、人々が飢餓に苦しんだ時代です。この杉に何があったのでしょうか。



隠岐は鎌倉・室町時代に後鳥羽上皇、後醍醐天皇が流された遠流の地としても知られています。

当時この島に流されたのは貴族や神職の身分の高い人々でした。苦しい生活をさせないため、日本海にありながら、暖流の影響で気候が比較的温暖、海産物が豊富で、食生活に苦勞のない

場所が選ばれたのです。後鳥羽上皇の島でのお世話をし、今でも墓守をしているのが村上家です。漫画家水木しげるさんの本名は村上姓で隠岐島にルーツがあるそうです。そのため島のあちこちでブロンズ像を見ることが出来ます。



旅行最終日、ガイドさんから「黒曜石」を頂きました。この石の産地は限られています。旧石器・縄文時代に石器の材料になったので全国各地から出土しており、当時から広く交易が行われたことを示しています。壮大な太古のロマンに触れることができました。

御殿場 あれこれ ⑦

松岡洋右別荘陶磁器館

昭和史を読んでいると「ニキ三スケ」という言葉が出てきます。ニキとは東條英機（ヒデキ）と星野直樹の二人、三スケは岸信介（ノブスケ）、松岡洋右（ヨウスケ）、鮎川義介の三人です。この五人は昭和初期に日本が満州事変をきっかけに中国東北部に作った「満州国」での軍・官・財の実力者でした。東條は後に対米英戦争を主導し、星野は東條内閣の書記官長（現在の官房長官）を務めました。三スケのうちの二人は御殿場に縁があります。安倍元首相の外祖父・岸首相（太平洋戦争開戦時は東條内閣の商工相）は晩年東山地区に住みましたが没後遺族から市に寄贈された邸宅が「旧岸邸」として公開されています（とらや工房とで「東山ミュージアムパーク」を構成）。東京渋谷区南平台町に私邸が

あった岸さん（隣には旧・統一教会、現・世界平和統一家庭連合の本部）が政界を退いてから御殿場に住んだのは以前から東山の松岡洋右別荘を訪れて御殿場の地が気に入っていたからでしょう（姻戚関係もあった）。

松岡洋右は外交官として自信過剰とも評される態度が国民の喝采を博しました。とりわけアメリカ留学中に身につけた英語力は国際連盟の総会で原稿なしで一時間二〇分の演説を行うなど、世界を驚かせています。

ただしこの演説は日本の満州における軍事行動を非難する各国に抗議したもので、国際連盟からの脱退、世界における孤立への道につながりました。

一九四〇（昭和一五）年に第二次近衛内閣では外務大臣として入閣、この年「日独伊三国同盟」を締結、翌年にはドイツ、

イタリアを訪問してヒトラー、ムソリーニと握手しています。

東條首相の対米英開戦を知った時、「三国同盟は僕一生の不覚であった」と言つて号泣したと、外務省顧問で松岡を最もよく知る人物が書いています。

敗戦後彼らは戦争犯罪人として連合軍に逮捕され、起訴されたA級戦犯は「東京裁判」で裁かれました。判決は東條英機以下七名が絞首刑、星野直樹終身刑（のちに釈放）、松岡洋右は結核が重くなつて出廷は一度きり、東大病院で一九四六年六月に死去、判決なしの免訴となりました。岸信介は容疑者として巣鴨拘置所につながれましたが東條らが処刑された四八年二月二四日に釈放されています。

米ソ対立の激化という国際情勢に、アメリカは過去の戦争責任を追及するより反共を優先したのです（鮎川義介は不起訴）。

* 現在の松岡別荘は洋右の四男志郎氏（故人）が建てた陶磁器館に父親が満鉄時代に蒐集した



（内藤 真治）

骨董品や政治家としての足跡を物語る資料を二階に展示しています（旧別荘は非公開）。

伺つて驚いたのはマイセンの磁器。志郎氏の夫人陽子さんのコレクションでした。テレビのお宝番組で見る美しい作品が所狭しと並んでいるのです。

松岡陽子さんはポーセリン教室（白磁器に絵付けをする）の指導の傍ら昨年館内にカフェ「とまり木」をオープン。木漏れ日の中で味わうこだわりのパントとコーヒーがお勧めです。



走る

介護職員 鈴木 秋夫

コロナ禍の前は三月に駿府マラソン、四月に日本平桜マラソン、五月に富士裾野高原マラソンと山中湖ロードレース、六月に西湖ロードレース、八月に富士吉田火祭りロードレース、十月に富士・鳴沢紅葉ロードレース、十二月に富士マラソンフェスタ(富士スピードウェイ)と年間八回の

今年五月に山中湖ロードレース大会が再開され、久しぶりに湖畔を完走しました。自衛官のときに募集を担当する部署に配属され、昼食に味噌ラーメンを食べることが病み付きになり、高血圧症を患い健康のために

と一念発起、始めたのが「走る」きっかけです。開催される時期によつては寒さや、暑さとの闘いです。山あり谷ありのコースを、ただ無心にゴールを目指して走り続け、ゴールし

た後の達成感は何とも言えない感無量のものです。

スタート直後はその日の体調に合わせながらマイペースで、沿道の声援を受けながら走ります。腕や足を軽快に動かし、心臓の鼓動を聞き、滴り落ちる汗を拭いながら、ほとんどのレースが10km前後のレースですが、ゴール近くになると太ももや、ふくらはぎに乳酸がたまり足が上がりません。ただひたすらに腕を振りゴールを目指し走り続けます。

後期高齢者まであと二年余り。体力も落ち、当然ながらゴールするタイムも落ちてきます。しかし、人生のゴールはまだ私には見えてきません。手足が動く限り走り続けます。今も休日には5kmから10kmのトレーニングコースを心地良い汗を流しながら走り続けています。アウトレットから深沢に向かって走るのが休日の日課になっています。見かけたら「歩くな！走れ！」と声を掛けてくれれば幸いです。

編集後記

大変な夏でした。こんな異常気象がこれから毎年続くのでしょうか。地球温暖化の段階は過ぎて、今や地球沸騰の時代だと国連の事務総長は言います。宇宙船地球号で暮らす人間同士が戦っている場合ではないと思うのですが。

コロナは依然としておさまる気配がありませんが、中でも当院では利用者の皆様に快適で充実した暮らしを、と日々取り組んでいる様子が伝わる原稿が集まりました。

青木さんからは「実は離島好き」という楽しい原稿が寄せられました。私の住む群馬県でも黒曜石製の鍬(矢じり)が出土しますが、原材料は長野県の諏訪湖に近い和田峠付近で採れる石です。

この新聞は読者の皆様と一緒に作るもの、ぜひ面白い話題を投稿してください。「山麓コラム」も歓迎です。

(内藤 真治)